

持続可能な社会保障制度のために

甲州市立松里中学校 3年 飯島 清

以前、学校で税についての教室が開かれた時に、国の歳出の多くが社会保障に使われていることを知った。社会保障制度は、私たちが安心して生活していくためにはなくてはならない制度だ。しかし、私は今まで社会保障制度は体の悪い人や障がいのある人、高齢者のためにあるのだと思っていた。

私は小学生の時に足をけがした経験がある。その時に、市から治療費の助成金が下りた。私の住んでいる甲州市では、中学生まで医療費を補助してもらえる。今思えば、病院の会計ではいつもお金を支払っていなかった。しかし、それが社会保障制度によるものだということが結び付いていなかった。さらに、保育園の延長保育や放課後の児童クラブなど、私は社会保障制度の支援をたくさん受けながら成長してきたことを改めて実感した。

そんな社会保障制度だが、その財源の中心は税金である。日本は超高齢社会に向かっていて、国民の二十一パーセントが高齢者だ。結果として、国民年金を払える人が減少し、働いている人の負担が大きくなってしまう。私は、そのリスクに備えて「自助努力」をすることが大事だと思う。

少ない財源を必要な所へ届けるために、私は事故にあわず、病気をせず、けがをしない努力をしていきたい。自分の健康管理を徹底することで事故や病気やけがなどにかかる社会保障の支出を減らすことにつながるからだ。また、私は祖母と同居しているが、積極的に祖母の手伝いをしたり、話し相手になったりしたい。そうすれば、社会保障と同じしくみを家庭内でも行える。

しかし、自分だけの力には限界がある。一人で上手くいかない時は、周りの人の手を借りるのも良いと思う。その分、周りの人が困っていたら自分もサポートをする「共助」ができる環境をつくる努力も大切だと思う。そのためには、家族や友達に留まらず、日頃から挨拶や会話を通じて近所の人とつながりを持ち、信頼関係を築く必要がある。

私が小学一年生の時に外を歩くのも困難なほど大雪が降り、防災放送で集まった近所の人と雪かきをした。そして、地域や住まいの安全管理のために共に助け合いながら作業した。こうした非常時に、地域で連携して問題解決できるような濃いつながりがあるのはとても心強い。身近な所から共助が発揮される世の中になれば、必要以上に社会保障にたよることもなくなると思う。

先日、テレビでオリンピック・パラリンピックの特集番組を見た。健常者も障がいのある人も、国境を越えて皆が平等に自分の能力を生かして活躍している姿にとっても感動した。大変なことも多いと思う。そういう人達のもとへしっかり保障が行き届いてほしい。持続可能な社会保障制度のために、まだ税金を払えない中学生の私でもできる自助努力をしていきたい。